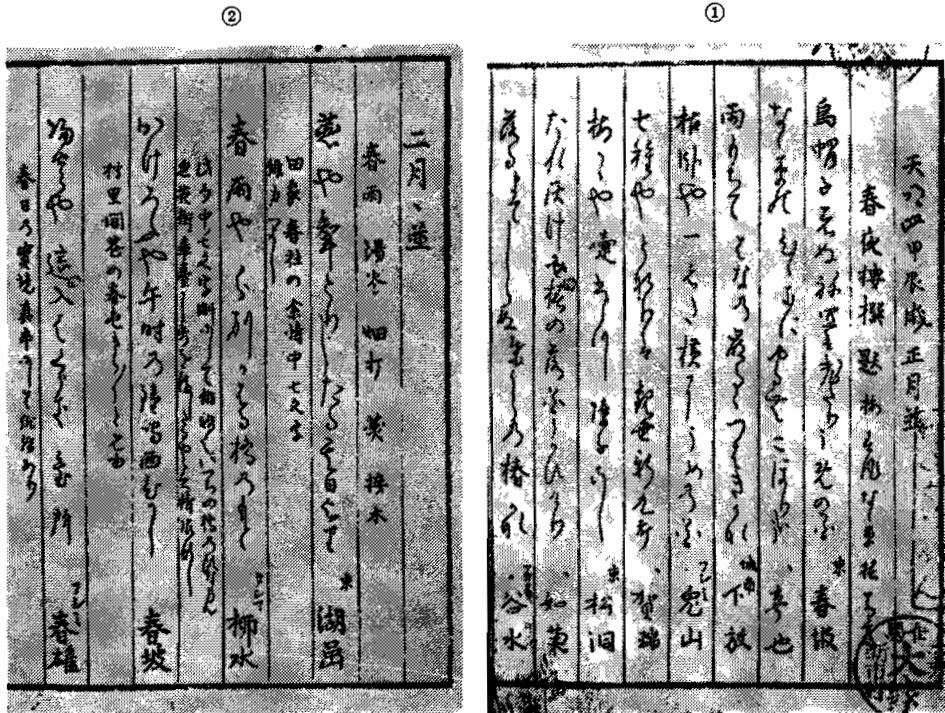


## 夜半亭月並句合(二)

\* 永 井 一 彰

昭和五十年度の『俳句』誌上に尾形仂氏が「月並俳諧の実態(一)と題する論文を発表されて以来月並句合に対する関心が高まり、尾形氏論文と題を接して出された中野沙恵氏「月並句合の実態―江戸時代末期の大衆俳諧」(『国文学漢文学論叢』第二十輯)を初めとして今柴藏氏「幕末江戸月並俳諧資料―投句募集ちらし張込帖所見」(『中央大学紀要』第三十九号)・桜井武次郎氏「上方の月並句合」(『連歌俳諧研究』五十三号)・服部徳次郎氏「名古屋近郊における庶民の俳諧活動(1)―募句ちらしからみた名古屋の月並句合」(『中京女子大学紀要』第十二号)の稿が相継ぎ、ひと昔まで顧みられることのなかった月並句合の実態もよほど明瞭にされて来た観がある。ところで、右各氏の論は何れも幕末を対照とされ、従ってそこに取り扱われた月並句合の募句ちらし・入選句披露の摺り物(返草)とも寛政以降のものに限られている。つまり、今まで各氏によって発掘されたちらし・摺り物によれば月並句合の歴史は寛政以前に溯り得なかつたと言える。しかし、その中でとりわけ注目すべきは桜井氏の御指摘で、氏は月刊の摺り物として最も古い例に寛政二(四年)の江戸雪中庵の判になるものを、また月並句合の名称を冠する摺り物の早い例に寛政五年の「平安聴亀斎撰月並句合抜萃」(天理図書館編屋文庫蔵「月並句合」わ・一八三・三七)を取り上げ

られ、特に後者について几董からの流れを暗示された。以下に紹介するのは、その聴亀庵紫暁の催しに繋がって行くと思われる天明年間の几董判月並句合の摺り物である。これによって月並句合の歴史は天明まで溯ることになるが、更に言えばその几董判月並句合も実は蕪村の催しを引き継いだものであった。蕪村が社中と月並の句会を開いていたことは周知の事実であるが、それとほぼ並行して月並句合を行っていたことは余り知られていない。蕪村を中心とする月並の句会は明和三年六月に始まり最晩年の天明三年十月まで連綿と続けられたが、彼自らがその書簡に伝えるところによれば既に安永四年には伏水社中を対象とする蕪村判の月並句合の催しがあった。以後、句会と並んで句合も続けられたらしく、その断片的な記録が蕪村書簡中に散見する。そして、最晩年の天明三年には所謂月並句合の形式をほぼ整えて正月から十月まで月並句合が催され、その約一年分の入選句は翌四年秋に百池の跋文を付し『花のちから』と題して出版されている。この蕪村判月並句合については『滋賀大國文』十八号の拙稿「夜半亭月並句合(一)」にあらましを記した。よって、この稿では管見に入った天明四年から七年までの几董判月並句合の摺り物について概略を記し、蕪村に始まった夜半亭月並句合が几董によってどのように継承され形式



を整え発展して行ったかを考えてみたい。

一、天明四年几童判月並句合

几童判になる月並句合の摺り物をまとめたものとして、最初に取り上げねばならないのは天理図書館綿屋文庫蔵『春夜楼撰集』（わ・一七三・二二）である。縦二二・一櫃横一六・二櫃。全一冊。表紙後補薄茶色。題簽はなく表紙中央上部に墨で「春夜楼撰集」と書く。序・跋・刊記なし。本文は半丁十行の若草色野紙を用い、匡郭は一丁が縦一八・四櫃横二七・八櫃。全十七丁。板芯は。

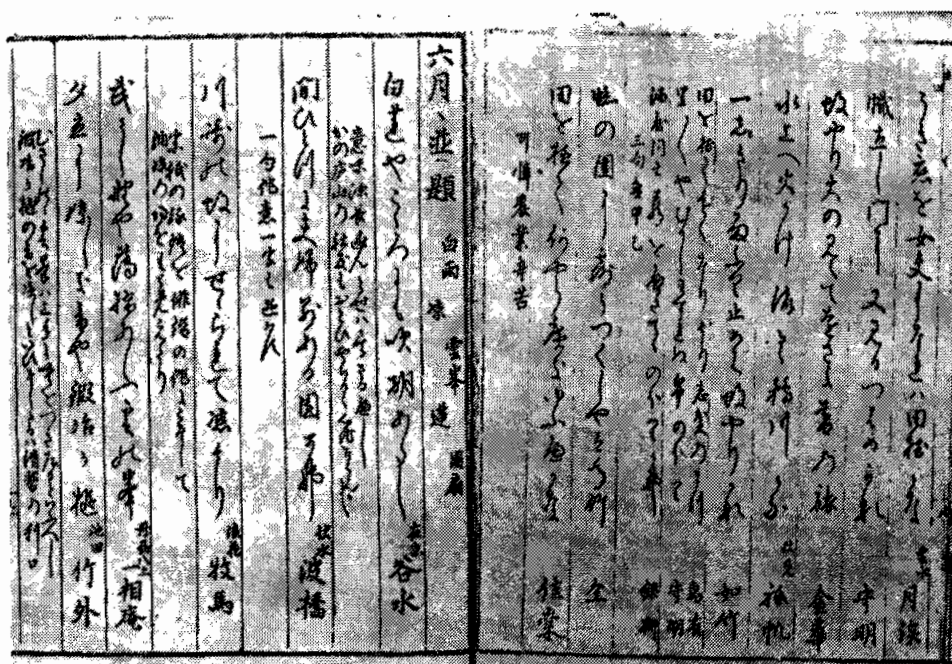
とあり、下部□欄に一から十七まで通して丁付を入れる。さてその内容であるが、次に掲げる一丁表・二丁表の写真(①・②)を参照されたい。まず第一丁巻頭に「天明四甲辰歳正月並」と刻し、二行目に「春夜楼撰」として季題を五つ挙げる。以下、一行に一句当て入選句を挙げて行き一丁裏終行に及ぶ。ここまでが一月分である。そして、二丁表の二月分では巻頭に「二月、並」とだけ記し季題五を挙げたあと入選句を並べるのであるが、この二月以降の分については一月分には見られなかった判者几童の各入選句に対する評語が付け加えられていることが注目される。この句評は五月分に含まれる十句を除き、他のすべての入選句に見られる。以降三月から十二月まで、巻頭に月数と季題五を掲げ入選句を配列し評を加えるという形式は変わらないが、四・五・八・九・十の各月には「惣句」として寄句数を明記していることも注意してよからう。月数と丁付の関係及び各月の入選句数寄句数を簡単な表にしてみる。

左の表によって、丁の割り当てが実に整然としており、各月とも一丁及至二丁にきちんと収められていることが知られる。丁付が一十

月数	丁付	入句	選句	惣句
一	日	18		
二	日	10		
三	日	9		
四	日	12	550句	
五	日	25	600章	
六	日	11		
七	日	18		
八	日	8	520句	
九	日	8	400余句	
十	日	15	500句	
十一	日	10		
十二	日	9		

七と通しになっていることからすれば、『春夜楼撰集』は一見一つのまとまった選集の如くにも思われる。しかし、右の事例に着目する時、『春夜楼撰集』と題し綴じ合わされたものは実は入選句披露のため月に印行された摺り物ではないかという推測が生まれるのである。これを裏付ける証拠は幾つかある。この摺り物は昇紙一行当てに句は一句また評語は一〜二行収めるのを基本としているが、八丁裏十六丁裏の二箇所に、一行に二句をまた一行に句と評語を書くという原則から外れた無理な割り付けをしている部分がある（写真③参照）。またそれとは反対に、例えば六丁表にはわざわざ行間をあけるといふ余裕を持った割り付けをしている部分がある（写真④参照）。割り付けに関するこの二つの事例は『春夜楼撰集』が一つのまとまった選集であるという前提に立つと、極めて矛盾した現象としてしか映らない。しかし、これが月並の摺り物であると考えれば、その矛盾は容易に解ける。割り付けに無理をしなければならぬのはその月の入選句を予定した丁のうちに何とか収めようとするからであり、余裕が生まれるのは予定した丁のうちにその月の入選句だけを収めれば良いからである。なお、付け加えれば、三月までの分とそれ以降の分とは板下の筆跡も

③ 8ウ・9オ



④ 5ウ・6オ

み〜水や氷の是れらとて此あり 也三 <small>非の意し</small> <small>世より田のまやよとて、こまを</small> <small>は世よりとて、こまを、こまを</small> み〜又切て二年のぼたんふ 如菊 <small>は世よりとて、こまを、こまを</small> <small>は世よりとて、こまを、こまを</small> 不〜ふふんはよ森にぬれられ 銀柳 <small>ふふんはよ森にぬれられ</small> 勤勤の葉で種もほいじかき 麻風 <small>勤勤の葉で種もほいじかき</small>	う〜白やの葉かきとてい依の夢 也三 <small>山は山は山は山は山は山は山は</small> <small>山は山は山は山は山は山は山は</small> <small>山は山は山は山は山は山は山は</small> <small>山は山は山は山は山は山は山は</small> 霜柿ふきのつ〜小川へ丸 社無 <small>霜柿ふきのつ〜小川へ丸</small> <small>霜柿ふきのつ〜小川へ丸</small> <small>霜柿ふきのつ〜小川へ丸</small> 揚子の大い帆家のけ〜さんりな 拳 <small>揚子の大い帆家のけ〜さんりな</small> <small>揚子の大い帆家のけ〜さんりな</small> <small>揚子の大い帆家のけ〜さんりな</small>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

⑤

四月の並 題 子規 短夜 牡丹 露 若葉 <small>然るに五言五句之難事</small> とかく〜代り〜あす〜あま〜しん〜れ 香麻 <small>とかく〜代り〜あす〜あま〜しん〜れ</small> <small>とかく〜代り〜あす〜あま〜しん〜れ</small> <small>とかく〜代り〜あす〜あま〜しん〜れ</small> 秋〜い〜帆家の〜小川〜あま〜しん〜れ 星月 <small>秋〜い〜帆家の〜小川〜あま〜しん〜れ</small> <small>秋〜い〜帆家の〜小川〜あま〜しん〜れ</small>	雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪 <small>雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪</small> <small>雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪</small> <small>雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪</small> <small>雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪</small> 雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪 <small>雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪</small> <small>雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪</small> <small>雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪〜雪</small>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

異なっている(写真⑥参照)。これもまた『春夜楼撰集』が同一同時の作業行程によって生まれた冊子ではないことを示している。『春夜楼撰集』には序・跋・刊記及び元題簽もない。この事実と如上の結論を考え併せれば、この書が天明四年几童判月並句合に於いて入選句を披露するために月毎に印行された摺り物を綴じ合わせたものであることは明らかである。因みに月刊の摺り物でありながら丁付を通しにするのは、これ以降天明七年までの例がほとんどそうになっており、恐らくは摺り物を届けられる作者の手元で綴じ合わせる便宜を計ったことと思われる。天明四年秋に百池の跋文を付し『花のちから』と題して出版された冊子も、実はその正体は天明三年蕪村判月並句合の月刊摺り物であったことは別稿に述べたが、几童も師の例に倣い月並の摺り物を印行していたのである。

では、蕪村の月並句合は几童によってどのように継承されたのであろうか。まず、天明四年几童判月並句合が明らかに前年の蕪村の催しを受け継いだものであることを確認しておこう。『花のちから』として再編発行された天明三年蕪村判月並句合の摺り物は、私見によれば一〇四月・五月・六月・七月・十月と板下の筆者が四度交替している。また、天明四年几童判句合の月並摺り物も、先に触れたように一〇三月・四月・十二月とやはり板下筆者が二回交替している。しかるに、天明三年七月・十月の筆跡と四年一〇三月の筆蹟は一致する(写真⑥及び前掲②参照)。これは、天明三・四年の句合が連続していることを示す一つの証拠となる。また、天明四年几童判句合に於いて、一月分の摺り物は半丁十行の罫紙を用い季節五を挙げて句評を交えず入選句を並べる形式を採るが、これは前年の蕪村の例に倣ったものである。ただ蕪村の場合は各月とも巻頭に季題を掲げるのみで月数を記さなかったのに対し、几童はそれを疎かにしていない。かように、摺り物の

⑥ 香川大本『花のちから』11ウ・12オ



<注>原本には罫線あり

京	春坡 8 ○△	如瑟 1 ○△	宇治田原 毛條 1 ○△
	如菊 5 △	井蛙 1	田原也笠 2 ○△
	亨也 4	繡波 1	ナニハ 守明 8 △
	佳棠 4 ○△	城 南下放 2 ○	銀獅 7 △
	社燕 4 △	城 三木 1 ○	二村 7
	東圃 4 ○	ヒロノ 哥蝶 1	扇風 4 ○
	湖岳 3 ○△	社中 1	何木 2
	楚山 3 △	フシミ 賀瑞 6 △	東車 2
	梅塙 3	春雄 6	牧馬 1
	金華 3 ○	祇帆 3 ○	雨凌 1 △
	舞閣 2 △	其韵 2 △	七布麻 1 △
	管鳥 2 △	鳥有 2 △	池田 竹外 3
	如竹 2	買山 2 ○△	芦村 1
	松洞 1 △	兔山 1 ○	東籬 2
	雷夫 1 △	鬼村 1	星府 1
	杉月 1 △	つゆ女 1	雲水 月溪 1 ○△
	斗雪 1 ○	鹿卜 1 △	タシマ 柳水 2
	松化 1 △	波橋 1	但馬温泉 因山 2 △
	雪山 1	雨止 1	丹州八上 一柏庵 1
	自珍 1 △	鶺鴒 1	丹波野垣 芦月 1
	吐文 1	其残 1	南山下 花臺 1
	湖蝶 1	フカクサ 谷水 1	灘河原邑 李才 1 △
	達知 1	洛 東 関雅 1	在 京 谷水 1
	月波 1 ○		斗入 1
	菱湖 1 ○△		

&lt;表 I&gt;

装丁・句合の形式という面から見ても几董が蕪村の句合を受け継いだことははっきりしているが、作者を調べてみるとそれは一層明確になる。天明四年几董判句合に入選した作者を地域別に分け各人の入選句数を合計してみると表Iのようになる。

表Iの作者のうち、金華・如瑟・井蛙・繡波の四人には地名を表わす肩書が見当たらないが、前二名は『花のちから』に京の作者として出ており、後二名もとりあえず京に含めて考える。また「フカクサ」「在京」と異なる肩書を持つ谷水が同一人物であるか否か不明であるが、一応別人と見ておく。作者総数73名。地域別に見ると、京28・城南4・伏水14・深草2・洛東1・宇治田原2・浪花10・池田3・在京2・但馬丹波各2・灘1・南山下1・雲水1となる。天明三年蕪村判句合の場合は作者総数75名。うち、京38・淀9・伏水3・城南8・宇治5・浪花4・篠山5・若州2・サコ1であった。彼此対照してみると、京とその近辺が主たる作者圏であることに変わりないが、天明三年に見られた淀の地名及び蕪村と早くから関わりがあった篠山の暮蓼社中が消え、浪花の作者が占める割合が増して池田が新たな作者圏として登場している点はやや目につく。しかし、概ねは天明三年蕪村判句合の作者圏を継承していることは首肯されよう。さて、表Iのうち○印を付したのは天明三年蕪村判句合にも名を連ねていた作者で合計18名居る。この18名の入選句計43句。年間の入選句総計が133句であるから18名の占有率は約28%となる。つまり、この句合の年間入選句の三割近くは前年度蕪村判句合の作者によって占められているわけで、これもまた両句合の関係浅からざるを示す数字である。次に、△印を付したのは天明四年以前の几董初懐紙に一度は顔を出している作者である。○印と重なる者も多いが、それを除いても20名の多数に及ぶ。几董の句合が蕪村句合の作者圏を踏襲しながらも、判者の交替によって新しい血が流入しつつあるさまを見てとることができよう。

以上の如く、天明四年几董判月並句合は明らかに前年の蕪村の催しを継承したものである。しかし、几董は師の句合をそのまま踏襲したのではなく、そこには形式・内容面に於ての整備発展が認められる。

まず、蕪村の場合は摺り物に年月を記すことはなかったが、几董はそれを改め一月分巻頭に年代を刻し、各月ともに月数を記すことを疎かにしない。これは些細なことではあるが、月並句合の摺り物の様式を整えたものとして評価すべきであろう。が、何よりも興味深いのは、几董の句合に於ては入選句に判者の評語が付されていることである。連月でない一時的な句合の場合とはかく、月並句合の摺り物でかように入選句に逐一評を加えたものは極めて珍しい。しかもその句評たるや、決して等閑でなく微細を穿ち懇切丁寧である。几董がどのような意図のもとにこの趣向を構えたかはまた調査の必要があるろうが、少なくとも句を寄せる作者側に立てば、作句・鑑賞・ありたき句ぶり等を考えるのに大いに参考になったであろうことは想像に難くない。入選句に逐一評を加えるという几董判月並句合の摺り物の形式は、この天明四年二月以降資料の現存する天明七年五月まで変わることはないが、その間作者達の被った恩恵・影響は実に計り知れぬものがある。では次に、その句評を手掛かりに入選句の配列を考えてみる。およそかような月並句合の摺り物に入選句を掲げる場合、高点句を巻頭に出す型とその逆の型がある。几董の場合、前者と見て間違いないようである。

とかくして折らぬ氣に成はたんなかな

春 雄

躊躇して花を惜しむ人情をもて  
よく牡丹の形容に對せり持題の  
外に物をからすして一句真卒なるを  
賞して巻首とす

(四月巻頭)

しつまりて御法聞ゆる霜夜かな  
一句の首尾心詞調ひたれば一卷中の  
秀逸たるへし

池田東 籬

(十一月巻頭)

右二例によって、巻頭の句が「一卷中の秀逸」であることは明白。以下、奥に行くに従って点は下がっている。それは、例えば

潮の声うしろに添ふて冬木立

佳 棠

潮の声けやけく聞ゆれと  
人をして寒からしむ

若鷹に老の拳のよへりかな

東 籬

若鷹といひて老の拳とうけたるへ今少し  
無念なれと委情調ひたれへ捨かたし

(中略)

つもるへき心つもりや夜の雪

繡 波

古き趣向なれと積といふ字を重ね  
たるを一句の作意といふへし

(十一月分)

というように、句選が条件付きになっていることから確認できる。このように入選句は高点句から順に並べられているのであるが、中には

本陣に武具の雫や春の雨

同 扇 風

春雨や衣干す旅の置火燧

二句趣をおなしうすといへとも姿をわかつ  
初は諸侯の旅泊にして威義嚴なり  
次は妻娘など俱したるよしのはつ瀬の  
花見順礼なるへし

(二月)

おもしろや蓮に雨聞山かつら

賀 瑞

涼しさや葉をすかしたる松の月

京 自 珍

荷葉の雨へ晴天の清閑  
松の月は晩色の麗景

(六月)

田を植て遠くなりけり志賀のまつ  
里々やむかしわすれぬ帯のほり  
酒屋同志藏をへたてよのほりかな

鳥 有  
守 明  
銀 籬

(五月)

といった同位評も間々見受けられる。かような入選句配列の形式も、天明四年以降変わることはない。

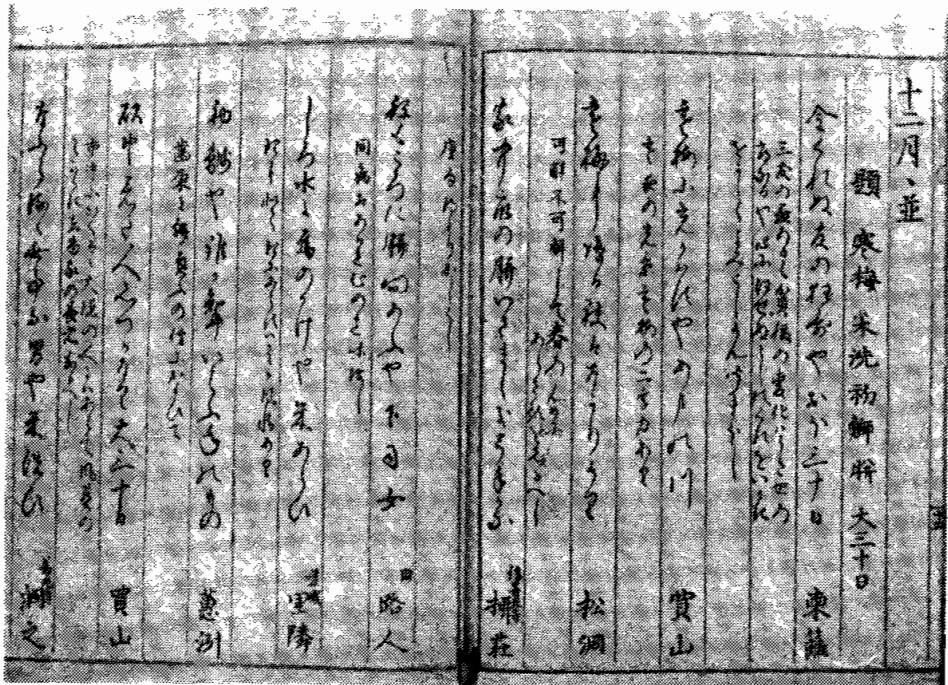
以上で、天明四年几童判月並句合の摺り物の概略はおおよそ御理解いただけたと思う。では、後になったが、この几童判句合が所謂月並句合の要件を備えていたかどうかを簡単に見ておく。所謂月並句合の備えるべき要件として、桜井武次郎氏はその稿「上方の月並句合」の中で

- ① 不特定多数を対象とする
  - ② 投句料(入花料)をとる
  - ③ 高判句に景品を出す
  - ④ 高判句を載せる刷り物(返草)を作る
- の四点を挙げられた。几童判句合の場合、①④は問題ないとして、②③についてはどうであろうか。几童は句会に關してはその句日記に詳しい記録を残しているが、ここに取り上げた月並句合についてはほとんど記すところがない。従って、それを裏付ける資料は皆無に近いのであるが、別稿に述べたように天明三年蕪村判月並句合は②③の要件も備えていたと考えられる。そこから推測すれば、句合の形式・作者圈ともども師の催しを継承した几童の場合にも、やはり右②③の要件を備えていたと考えても多く誤らないと思われる。

二、天明五年几童判月並句合

別稿に触れた如く、柿衛文庫蔵『花のちから』には几童判月並句合の摺り物が全部で五十二丁綴じ合せてある。これは、『花のちから』の所蔵者が同じく手元にあった几童判月並句合の摺り物を同類のものと思なし、一旦前後表紙をはずして綴じ合わせたものと考えられるが、この五十二丁の中から野紙の形態・板下筆蹟等を手がかりに天

⑦





明五年の摺り物十二丁を拾い出すことができる。これもやはり半丁十行の罫紙を使用し、板芯の形態・匡郭とも天明四年のものにはほぼ等しい(写真⑧参照)。月数と丁付の關係及び各月入選句数は次の通りである。

月数	丁付	入選句数
二	四	20
三	四	9
四	四	9
六	四	10
七	四	8
八	四	9
九	四	10
十	四	10
十二	四	10
十三	四	10

丁付四とあつたはずの一月分、丁付四とあつたと思われる五月分計三丁が失なわれて残らない。従つて、一年分計十五丁のうち十箇月分十二丁が現存することになる。一箇月分の入選句を一丁及至二丁に収めるのは天明四年の場合と同じであるが、六月分巻末の一句が七分九丁表にかかり、また十一・十二月の二箇月分が十三丁から十五丁にわたつて収められている点がやや異なる。同じような例は天明三年蕪村判句合の摺り物にも見られたが、この場合も六・七月分は七月に十一・十二月分は十二月にそれぞれ一括して披露印行されたものと思われる。各月巻頭に月数と季題を掲げ、以下句評を交えながら高点句から順に入選句を連ねる形式は天明四年に全く同じで、これが月並句合の摺り物であることは疑いを容れない。では、この一まとまりの摺り物が天明五年の分と特定できる理由は何かと言うと、それは十・十一月分巻頭にそれぞれ「於東都石丁即考」(写真⑨参照)「於駿府時雨窓客舎判」とあることによる。「東都石丁」は天明六年初懐紙に凡董の



⑧

言う「師か師宗阿居士の昔夜半亭を結へる石丁」に他ならぬ。凡董が天明五年にこの地を訪れ藪太の世話で夜半亭三世を継いだことは『統一夜松前・後集』その他に詳しい。またその折駿府の時雨窓文母のもとに立ち寄っていることはやはり『統一夜松前集』によって確認することができる。月並の催しを絶やさないうために、凡董は旅先にあつても加判していたものと思われる。かくして、このひとまとまりの摺り物が天明五年の分であることはこれまた疑いを容れないところである。

次に入選作者とその句数計を表にしてみよう(表II)。  
作者総数52名。入選句合計105句。このうち○印を付けたのは天明四年句合にも名の見えた作者で、計20名。20名の入選句合計は50句となり、その占める割合は大きい。これによって、天明五年句合が四年と連続していることが知られよう。また、板下の筆蹟はこの天明五年分



傾向はどのように理解すれば良いかということになるが、それについては四章で述べることにする。

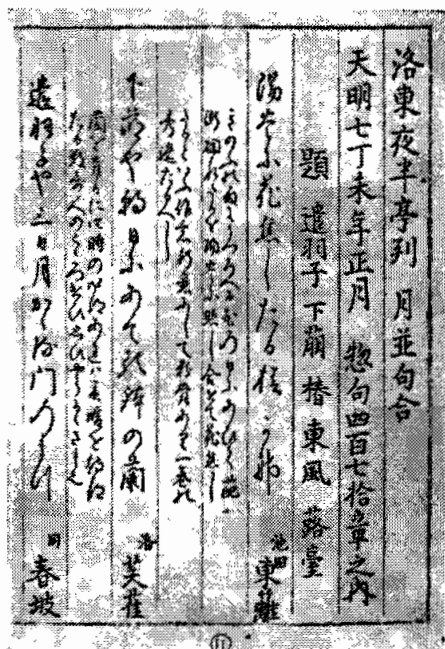
三、天明六・七年几童判月並句合

関西大学図書館に『夜半亭撰月並拔萃』と題する一冊がある。本の大きさは、縦二二・六種横一五・九種。表紙後補茶色。題簽は左肩にあり、縦十六・三種横三・九種。一部に青色の曇りのある白地の紙に「夜半亭撰月並拔萃」と墨で書く。これに綴じてあるのが天明六・七年几童判月並句合の摺り物である。用紙は天明四・五年と同類の半丁十行の若草色罫紙で、全二十八丁。ただし、罫紙の匡郭は天明四・五年のものより縦横とも一回り小さい。また、板芯も異なり

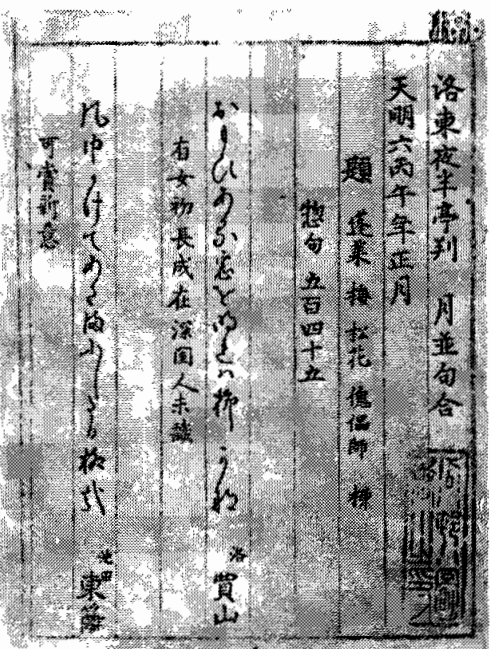
とあって、下部の○の中に丁付を入れる。全二十八丁のうちわけは、天明六年一月～五月・十月～十二月分計十九丁と天明七年一月～五月分計九丁である（写真⑩⑪参照）。六年の六月～九月分それぞれに七月六月以降の分が見当たらないが、このうち前者の分については先に触れた柿衝文庫蔵『花のちから』に綴じ合補注わされている五十二丁の摺り物の中から計九丁を補うことができる。従って、天明六・七年几童判月並句合の摺り物は全部で三十七丁が現存する。因みに、板下の筆蹟は三十七丁すべて同じで、しかもそれは天明四年四月～十二月分及び五年度分の筆跡と一致する（写真③④⑦⑧⑨⑩参照）。これらをわかりやすく表にしてみると次のようになる。

天明七年は六月以降の分が残らない（五月分も丁付㊦とあった二枚目欠か）が、六年度分は丁付から判断して完備する。なお、六年九月・十月は㊤～㊦の三丁に、また閏十月から十二月までは㊧～㊩の七丁（㊤二丁あり）にまたがっている。これは天明五年にも見られた月遅れ

⑩



⑪



月数	付	入	選	句
<天明六年>				
一	○	○	12	545
二	○	○	32	1015章
三	○	○	21	755句
四	○	○	10	690章
五	○	○	18	840句
六	○	○	38	905章
七	○	○	39	775章
八	○	○	20	805章
九	○	○	10	860章
十	○	○	19	凡810句
閏十	○	○	25	915章
十一	○	○	15	805句
十二	○	○	46	
<天明七年>				
一	○	○	23	470章
二	○	○	27	715句
三	○	○	18	685句
四	○	○	21	660句
五	○	○	(10+α)	550句

の一括披露であろう。さて、摺り物の形式は天明四・五年と変わることはないが、天明六年十二月を除き他の全ての月に「惣句」として寄句数を記載していることが注目される。入選句月平均は天明六年約23.5句、七年(除五月)約22.3句と何れも天明四・五年を上回る。また寄句数も天明六・七兩年平均して約70句となり、四年に較べると月平均約20句ほど増えている。この数字は几董判月並句合が増々盛行に趣いていることを何よりも明確に示すが、皮肉なことにはそれと反比例して、天明四・五年にはあれほど懇切丁寧であった几董の句評の姿勢が崩れて来ている。例えば、天明六年二月は寄句数一千十五章と最も多くそれに伴ない入選句数も32の多きに及ぶが、そのうちの13句には句評が見当たらない。また三月は、入選句21句のうち11句を巻末に挙げ「右十一句群出」とそつけない。他にも

七年一月 十印十三章(巻末)

二月 七句おのゝ趣を異にすといへとも点位甲乙なし

六年六月 右七句十点・右十一句九点(巻末)

七月 (巻末に15句を並べ句評も点もなし)

十二月 (19句を並べ) 右為抜群

(巻末18句を並べ) 右為屯

というような十把一絡げの扱いが目立つ。また句評をするに際しても、中には六年三月巻頭句のように半丁十行のうち七行にびっしり書き込んだ例もあるが、概ねは簡略である。几董にしてみれば、句合の催しが盛行に趣くことは興行面からみれば有難いが、真摯な指導という立場からすればその分だけ句評が疎かになり、痛し痒しといったところではなかつたろうか。しかしそうは言っても、几董の句を選ぶ基準が以前に較べさほど甘くなつたとは思われない。これ以前で寄句数の判明している天明四年四・五・八・九・十月の平均入選率は約2.7%であるが、天明六年は寄句数不明の十二月を除き約2.7%、七年は入選句数の定かでない五月を除き約3.5%である。

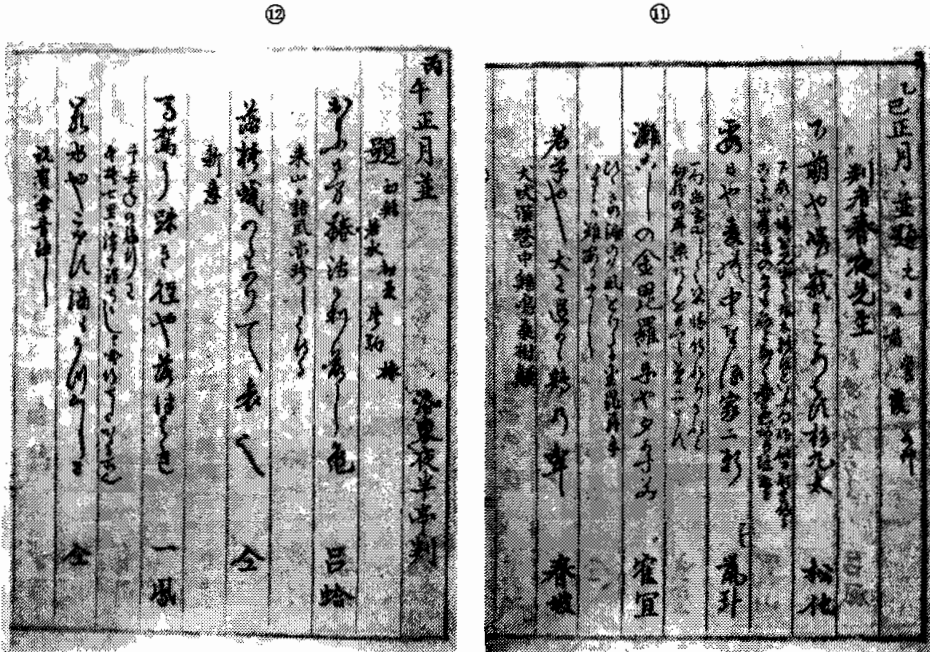
次に天明六・七年を一括して作者と入選句計を挙げる(表Ⅲ)。

作者総数138名。入選句合計404句。○印を付したのは天明四年句合に、△は五年句合に、◎は兩年句合に出る作者である。◎○△合計45名、句数計195句。故に、天明四・五年句合の言わば常連が入選句の半分近くを占めていることになる。また地域的に見ても、この天明六・七年句合は洛・伏水・深草・嵯峨・宇治・浪花・池田・兵庫・伊丹・灘・但馬・信州善光寺と、天明四・五年句合の主たる作者圏を包括している。

かように、この天明六・七年句合では作者数・寄句数・入選句数とも増え作者圏もこの年までの範囲を包括して、几董判月並句合の盛行はまさに頂点に達したかの如き観がある。

																				洛								
鳳	鳳	奇	松	婦	亭	曉	蘿	鈍	芦	一	自	桂	寸	旭	芙	一	如	雷	呂	甫	菱	楚	沙	自	南	春	買	
尾	眉	弊	洞	樂	也	山	音	人	月	鳳	垂	同	月	砂	溪	雀	差	菊	夫	蛤	口	湖	山	長	珍	昌	坡	山
1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	4	5	5	5	6	6	7	9	10	14	15	22	
			△		○				○	△	△						○	○			◎	○		◎		◎	◎	
伏																												
水																												
胡	鶉	月	賀	兔	米	昭	其	花	湖	喜	登	紫	之	松	綾	婦	太		淇	万	鳥	龜	東		湖	文	其	
成	閨	莊	瑞	山	久	換	遊	菴	山	與	辰	曉	尺	雨	衣	鳥	心		唱	竹	佐	曉	卜	圃	薰	岡	門	答
2	3	3	4	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
			◎	○	○			○															△	○				
浪在宇治田原																												
花京原																												
可	百	雲	京	つる	鳳	うめ	雨	交	几	囀	一	銀	二	擣	夜	毛	維	灌	里	魯	巴	希	蒲	鼠	其	石	柴	
心	堂	我	甫	雄	卿	女	凌	風	雪	風	透	獅	村	室	吟	條	笑	園	隣	哉	半	香	雙	門	玊	殘	鼓	石
2	3	3	3	3	4	5	5	5	7	8	8	9	10	11	1	2	1	1	1	5	3	1	1	1	1	1	1	1
				△			◎					◎	◎	△		○				△	△	○				○	△	△
池桶																												
田葉																												
竹	不	何	呂	富	左	峨	杜	鷲	菅	玉	野	菊	竹	帛	千	仙	里	南	露	岸	由	七	魚	百	梅	甘	守	
外	染	木	律	坊	兆	蓮	山	右	目	水	園	遊	十	男	風	澄	奧	橋	湖	彦	松	水	舟	三	鳩	後	三	明
12	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2
◎		◎													◎				△			○						◎
越後十日町																												
備中玉島																												
桃	湖	二	洞	路	左	柳	呂	五	文	和	佳		月	桃	千	東	鶉	丹	伊	兵								
路	東	葉	芝	人	文	莊	吹	什	兆	且	七	藍	丘	舍	溪	瓦	居	舍	耕	巴	鬼	為	雪	朶	李	東		
1	2	1	1	1	2	2	2	3	3	1	1	1	3	3	5	1	2	2	6	3	2	2	2	2	5	6		
				△	△		△	△	△										△		△			△	△	◎		

<表 III>



四、天明五・六年別立ての句合

二章で見た天明五年の句合に於ては、句合の規模縮少傾向とともに京及びその近辺の作者の占める割合が減少する傾向が認められた。その理由としては、几童が天明五年から六年にかけて右に述べた一連の句合とは別に、京を中心とする別立の句合を催していたことが挙げられる。この天明五・六年の別立ての句合の摺り物は、宮田正信博士架蔵の『乙巳丙午 夜半亭』と題する冊子に綴じ合わされている。本の寸法は、縦二一・二櫃横一六・三櫃。表紙は前後とも厚手の和紙を用い、前表紙一ばいに「丙午 夜半亭」と、後表紙に「曲欄亭友之」と墨で書き紙繕で仮綴する。全十九丁すべて几童判月並句合の摺り物で、やはり半丁十行の若草色野紙を用いる。野紙は先の天明四・五年句合で使用されたものと同型であるが、匡郭はそれよりも一回り小さい。月数・季題・入選句・句評と並べる摺り物の形式は今までのものに全く同じである(写真⑩⑪参照)。全十九丁のうちわけは次の通り。

月数	丁付	入選句数	句数
＜天明五＞			
一	日	9	
二	日	9	
三	日	8	
四	日	9	
五	日	8	
六	日	8	
七	日	8	
八	日	17	
九	日	9	
十	日	9	
十一	日	5	
十二	日	4	
＜天明六＞			
一	日	10	
二	日	25	960句
三	日	25	1115吟
四	日	18	885吟

天明五年六月分(丁付因とあったか)及び六年五月以降の分は残らな

い。丁付は概ね通しになっているが、五年八月分の一丁目と十一・十二月分一丁目には丁付がない。六年二月～四月には寄句数を掲げる。板下の筆蹟は全十九丁すべて同じであるが、各月の字高・字の大きさ・彫り・墨の濃さなどかなりのばらつきが認められる。なお、その筆蹟は先の一連の句合のものとは異なっている。句評は天明五年分についてはすべての入選句に見られるが、入選句寄句とも最も多い天明六年三月になると「八句同位・三句同位・十一句同位」という大まかな扱いが目立つようになることは、先の句合の場合と全く同じである。六年二月～四月は先の句合分と合わせてみると、几董は各月二千句近い寄句を捌かねばならなかったわけで、無理からぬところであろう。因みに、この句合の六月二月～四月の平均入選率は約2.3%であり、先の場合と較べ決して高くない。この句合が、先に見た天明四年～七年の句合と別立てであることは板下筆蹟の相違からもそれと知られるが、何よりも各月季題が先の天明五・六年のものと重ならないことがそれを十分に証明している。

次に、作者と入選句計を五・六年一括して掲げる(表IV)。

作者総数66名。兵庫の二名を除き、他はすべて京とその近辺の作者である。これによっても、この句合が先の一連の句合とは別立てに京とその近辺を対象に催されたものであることが知られる。先の句合に見えた作者も多数名を連ねるが京・伏水・深草・嵯峨と作者圏が重なり同一判者によって同じ年に催された句合であることを思えば、それも蓋し当然であるといえよう。

以上、天明四年から七年までの几董判月並句合について、現存する入選句披露の摺り物を手がかりに大まかな流れを述べて来た。この後几董が没する寛政元年十月まで約二年の間、この月並句合が引き続き

梅	芦	曉	仙	潑	之	古	御	松	自	疎	呂	南	不	米	一	寸	呂	松	董	董	我	春
居	月	山	木	皮	尺	竜	黍	雨	珍	涼	蛤	昌	醉	久	風	砂	風	化	亭	(自同)	竹	村
1	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	4	4	4	5	5	6	7	7	12	9	13	13
一	松	芦	峯	化	悟	松	寸	春	一	松	暗	藕	哥	凸	如	哥	鳩	野	不	柳	綺	緑
風	鳥	仙	鳥	山	亭	堂	長	谷	雲	洞	月	風	紫	凹	菊	葉	波	蚯	言	枝	山	川
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
			兵		サ		フ															フ
			庫		カ		カ															シ
			里		魯		艸															ミ
			松		哉		巴															買
			1		1		番															山
			2		1		2															12

<表 IV>

催されたどうかは不詳である。しかし、書き出しでも触れたように、几董判になる夜半亭月並句合は春夜楼を継承する聴亀庵紫曉によって引き継がれて行った形跡がある。管見によれば、紫曉の月並句合の摺り物は、寛政五年度約一年分(綿屋文庫蔵(月並句合))と寛政六年度一年分(補衛文庫蔵『月並抜句集』のうち)が現存する。これらを併せ考え

ることによって蕪村に始まった夜半亭月並句合の流れは更に明確に跡付けることができるが、それについてはまた稿を改めたい。

〔補注〕 柿衛文庫蔵『花のちから』に綴じ合わされている几董判月並句合の摺り物全五十二丁のうち、第二章で述べた天明五年分十二丁及びこの章で触れた六年分九丁を除く三十一丁は、関大蔵『夜半亭撰月並拔萃』と四章で取り上げる『乙巳丙午夜半亭』とに全て含まれる。

追記 この稿を成すに際して、岡田利兵衛先生に柿衛文庫蔵『花のちから』『月並抜句集』閲覧の御高配を賜り、剩え論文に引用する御許しをいただいた。先生の御高配が無ければこの稿は成らなかつたと言っても良い。学恩に甚深の謝意を表する次第である。

(昭和五十五年九月 記)

### On “Tsukinami-Kuawase” of *Yahantei-Buson*

Kazuaki NAGAI

#### Summary

The present paper is on “*Tsukinami-Kuawase*” (Monthly Haiku Gatherings) Of “*Yahantei-Buson*” and “*Kito*”.